

御俗姓

①

親鸞聖人のご生涯を偲ぶ

本願寺第八代蓮如上人がお書きになった『御文章』のなかでも、文明九年（一四七七）の御正忌報恩講に際して書かれた一章を『御俗姓』と呼称し、本願寺では、毎年の報恩講の際に拝読しています。今回より二回にわたって、この『御俗姓』を拝読いたします。今回はまず、『御俗姓』の内容と背景についてうかがい、親鸞聖人の「俗姓」からご生涯が示された最初の段をもとに講じていただきます。講じてくださるのは、相愛大学准教授・佐々木隆晃先生です。



佐々木隆晃
相愛大学准教授

■御俗姓とはどんなお聖教ですか？

《本書の内容》

『御俗姓』は、本願寺第八代の蓮如上人が、文明九年（一四七七）の御正忌報恩講にあたってお書きになった「御文章」です。

文末に、「文明九年十一月初めのころ、にはかに報恩謝徳のために」筆をとって記したとあります。十一月は親鸞聖人がお亡くなりになった月で、弘長二年十一月二十八日の昼頃、

頭を北に、顔を西に、右脇を下にして臥したまま、とうとうお念仏の声が絶え、お亡くなりになったと伝えられています。十一月二十八日は旧暦で、これを今の暦になおすと一二六三年一月十六日にあたりますので、西本願寺では例年一月九日から十六日にかけて御正忌報恩講が勤められています。蓮如上人の当時、十一月に勤められていた報恩講にあたって、本書『御俗姓』をお書きになられたのです。

本書は『俗姓の御文』とも呼ばれ、まずはじめに、親鸞聖人の俗姓（出家得度前の姓）を明かし、当時の政治の中心にあつ

た藤原氏の出身であること、皇太后宮で大進という役職をつとめた日野有範の子であることなどが記されています。そして、聖人の行跡を述べて、浄土真宗のみ教えをお示しくくださったことが説かれます。さらに、報恩講における念仏者の心得を示し、真実信心をいただくよう勧められています。

《本書の特徴》

『御俗姓』という題名を見ると、親鸞聖人の出家得度前の姓からご生涯を記し、聖人の遺徳を讃仰することが全体にわたる本書の目的であるように見えるかもしれませんが、実際、今号で拝読する本文は聖人の行跡を述べている箇所ですので、本書にそういった目的があることは間違いありません。ですが、それは本文でいうと最初の四分の一ほどです。中ほどからは、真実の信心をいただくことの重要性が力説されています。これは、蓮如上人が数多くお書きになった「御文章」に常に教示されている内容です。ですから、『御俗姓』という題名は本書全体の内容をあらわすタイトルではなく、本文のはじめに出てくる特徴的な言葉をとってそう呼んでいるのです。

本書の本文について、親鸞聖人の行跡を述べる部分には、覚如上人の『報恩講私記』や『御伝鈔』、存覚上人の『嘆徳文』

など、それまでに成立していた聖人のご生涯を記すお聖教に基づいて書かれている言葉が多く見られます。現在、西本願寺で勤められている御正忌報恩講では、法要の期間中の一月十三日に『御伝鈔』の拝読、十四日に本書『御俗姓』の拝読、十六日の勤行「報恩講作法」のなかで『報恩講私記』と『嘆徳文』の拝読があります。親鸞聖人のご法事である報恩講において、拝読されるこれらのご文を通して、ゆつくりと聖人の行跡を偲ばせていただくことができます。それらのお聖教のなかで、本書『御俗姓』は最後に成立した一番新しいものですから、聖人の伝記のリメイク版のようにも思えます。しかし、蓮如上人が本書を書かねばならなかったその思いは、後半に至って出てくるといえます。それが、報恩講における念仏者の心得、真実信心をいただくことの勧めなのです。

《本書が書かれた背景》

本書が書かれた文明九年は蓮如上人六十三歳の年で、二年前に越前国吉崎（現在の福井県あわら市）を退去し、畿内へ戻っておられます。またこの二カ月後の文明十年一月には山城国山科（現在の京都市山科区）に坊舎の造営を始めておられ、本願寺の再興に向かって精力的な活動をなさっています。当時の

蓮如上人の周りには、たくさんのお帰依者が集まっていたのです。しかし、親鸞聖人が亡くなってから二百年が過ぎ、集まってくるたくさんのお帰依者のなかには、信心をいただいた念仏者がいかに少ないかということが、蓮如上人にとっての懸案事項だったようです。

一宗の繁昌と申すは、人のおほくあつまり、威のおほきなることにてはなく候ふ。一人なりとも、人の信をとるが、一宗の繁昌に候ふ。〔蓮如上人御一代記聞書〕末、一二七二頁
という蓮如上人の言葉が伝えられています。一宗の繁昌というのは、人が多く集まり、勢いが盛んなことではない。たとえ一人であつてもまことの信心を得ることが一宗の繁昌なのである、と仰っているのです。

《ご生涯を偲ぶ意味》

本書『御俗姓』をはじめ、親鸞聖人のご生涯が記されているお聖教を拝読することには、どのような意味があるのでしょうか。もちろん、親鸞聖人という方がどのような人物であったのかを知りたい、七十五年も語り伝えられる人物の人生に興味がある、そういうこともあるかもしれませんが、ただ、報恩講という親鸞聖人のご法事においてご生涯を偲ぶということを考え

ると、もう少ししつかりと受けとめてみたいと思うのです。

たとえば、親鸞聖人の曾孫の覚如上人は、聖人の三十三回忌にあたって『報恩講私記』をお書きになり、その翌年『御伝鈔』を著されました。覚如上人の誕生は文永七年（一一七〇）で、親鸞聖人がお亡くなりになって七年後のことです。お会いしたことのない曾祖父親鸞聖人のご生涯をお書きになるには、聖人の門弟をはじめとした先輩方から情報収集をしなければなりません。関東のご旧跡を巡った時や、京都の大谷廟堂にお参りの方々から、熱心に教えを受けられたことでしょうか。

三十三回忌のご法事ともなると、故人と直接ご縁のあった方はご高齢になっていくことが多いものです。親鸞聖人の三十三回忌にお集まりの方々は、当時二十歳代であった覚如上人から見ると錚々たる重鎮といったところでしょうか。聖人について、いろいろなことを語って聞かせられたでしょうし、そのなかには、そろそろきちんとまとめておかねば收拾がつかない状態のことながらもあつたかもしれません。それらをまとめて、聖人のご生涯とご事績を整理されていきました。

そうしてできあがった伝記の言葉を通して、人々はそれぞれに親鸞聖人の在りし日を偲び、その姿、その声を思い浮かべたことでしょうか。聖人が生涯を通してお示しくださったお念仏の

み教えを思い起し、いのちある者が必ず背負っていかねばならない死を見つめ、聖人の往かれた世界、お浄土へ、私も今、歩んでいることをしつかりと胸に刻み込むことが、聖人のご法事をお勤めし、ご生涯を偲ぶ大切な意味であるといえるでしょう。

それを承けて、蓮如上人は本書『御俗姓』をお書きになりました。蓮如上人のご教化によって、すでに多くの念仏者が報恩講にお参りしていたようですが、形ばかり多くの人が集まっても一宗が繁昌しているように見えても、信心のおぼつかないようでは何にもならない。報恩講における念仏者の心得として、阿弥陀如来の願いをしっかりと聞きひらき、ふたごころなくおまかせする真実の信心をいただくこそ報恩の仏事となるという

ことを、本書においてお示しになっているのです。仏事がいつの間にか疎かになり、故人の教示も忘れがちになってしまふのは悲しいことです。身をもって死にゆく姿を示し、いのちのありようを教えてくださいましたことを受けとめた時、自らの生を見つめ、いのちの帰っていく世界に思いを致すことができます。そして、故人と再びまみえることのできるお浄土への歩み、「仏道」に出遇わせていただいたことを心得てこそ、親鸞聖人の恩に報いる仏事となることを、本書を通して味わわせていただきたいと思います。

【註釈版本文】▼二二二頁

三 それ祖師聖人（親鸞）の俗姓をいへば、藤氏として後長岡丞相 内鷹公の末孫、皇太后宮大進有範の子なり。また本地をたづぬれば、弥陀如来の化身と号し、あるいは曇鸞大師の再誕ともいへり。しかればすなはち、生年九歳の春のころ、慈鎮和尚の門人につらなり、出家得度してその名を範宴少納言公と号す。それよりこのかた楞嚴横川の末流をつたへ、天台宗の碩学となりたまひぬ。そののち二十九歳にして、はじめて源空聖人の禅室にまゐり、上足の弟子となり、真宗一流を汲み、専修専念の義を立て、すみやかに凡夫直入の真心をあらはし、在家止住の愚人ををしへて、報土往生をすすめましましけり。

【意 訳】

三 さて、宗祖親鸞聖人は、出家得度前の姓を藤原氏といいます。後長岡の大臣といわれた藤原内鷹の子孫にあたる、皇太后宮で大進という役職をつとめた日野有範の子です。また、本来の姿をさぐり求めると、阿弥陀如来の化身であり、あるいは曇鸞大師の生れ変わりともいわれられます。そして、九歳の春、慈田和尚の坊舎において出家得度し、範宴と名乗られたのです。それから、比叡山横川の首楞嚴院に伝えられる、源信和尚の教えの流れを受け、天台宗の学問を深く極めた人となられました。そののち、二十九歳の時、はじめて法然聖人の吉水の草庵に参つて、すぐれた弟子となり、浄土真宗の教えを信受して、本願の名号をひとすじに称え、ふたごころなく阿弥陀如来におまかせするという趣旨を受けとめ、ただちに凡夫の身のままで救われていく真実の信心を明らかにし、生活に束縛され、罪業を重ねながら生きるしかない凡夫を導いて、お浄土への往生をお勧めくださいました。

■親鸞聖人の俗姓

親鸞聖人のご生涯を述べていくにあたり、まず聖人の俗姓、つまり出家得度前の姓を藤原氏ということが記されています。本文の藤氏とは、藤原氏の略称です。ご存じの通り藤原氏は、

大化の改新に功績のあつた中臣鎌足が賜った姓で、鎌足の子不比等、その子房前、さらにその子真楯と、政治的に重要なポストを担った一族です。それは江戸時代まで続き、貴族社会の中心にありました。鎌倉時代に入ってその嫡流が近衛、九条、二条、一条、鷹司の五家に分立し、摂政・関白を交代

で担います。この五家以外にも数多くの支流が存在していて、その一つが日野家です。そして、藤原真楯の子が内磨で、後長岡の大臣とよばれていました。これら政治の中心にあった方々の子孫にあたるのが、聖人の父日野有範でした。

ここに記されている親鸞聖人の俗姓を見ると、聖人がいかに尊いかということを、言葉を通じて打ち出しているようにも見えます。藤原氏の一族であるから、将来を約束された素晴らしき徳を持っておられたのだと。ですが、親鸞聖人のご教化について少しでも聞いたことのある方なら、そのような目的の記述は聖人を偲ぶのにふさわしくないとお感じになるのではないのでしょうか。

親鸞聖人の曾孫覚如上人の『御伝鈔』に、聖人がお亡くなりになった時の様子を示して、

口に世事をまじへず、ただ仏恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらはさず、もつばら称名たゆることなし

(一〇五九頁)

とあります。口から出てくるのは世事(世間のことがら)ではなく、仏恩に対する感謝であり、声に出てくるのは余言(余計な言葉)ではなく、南無阿弥仏ばかりだった、ということです。お亡くなりになる時の様子として記されていますが、これはそ

のまま、聖人のご生涯全体をあらわしていると見ることもできるでしょう。「世事」「余言」とは、具体的には、名誉、利益、財産、欲望といった、私たちが普段の生活で追い求めているものと考えられます。その欲望に振り回され、いかり、はらだち、そねみ、ねたむ心を離れることができない私たちの姿を、親鸞聖人は「凡夫」とお示しになりました。

親鸞聖人の俗姓は、こういった欲望を追い求める生き方においては、人より恵まれた状態にあつたかもしれないかもしれません。しかし、世俗の栄耀栄華を極めたとしても、真の満足は得られないことを明らかにしているのが「仏道」です。世俗の価値観を離れ、仏道を歩む出発点となるのが出家得度です。そして、俗姓を離れ、釈尊の弟子「釈氏」として生きていくのです。凡夫が救われ、お浄土へ往生するという仏道をお示しくくださった親鸞聖人のご生涯は、「世事」「余言」を離れた真実の生き方であったことを明らかにするために、ここに聖人の俗姓を述べられているとうかがえます。

■ 本地をたずねる

親鸞聖人の本地、つまり本来の姿をさぐり求めると、阿弥陀如来の化身、曇鸞大師の再誕であると説かれています。

まず曇鸞大師について考えると、親鸞聖人が曇鸞大師を深く崇敬なさっていたことは明らかです。それは、親鸞という名前が天親菩薩と曇鸞大師から一字ずついただいていることや、七高僧のお徳を嘆じた『高僧和讃』のなか、曇鸞讃が三十四首と最も首数が多いことからうかがえます。

天親菩薩のみことをも 鸞師ときべたまはずは

他力広大威徳の 心行いかでかさとりまし (五八三頁)

と、曇鸞大師のお示しによつて、阿弥陀如来の救いの広大無辺なはたらきを正しく領解することができたことを述べておられます。親鸞聖人の教えの中心となる「本願力回向」「他力」というものは、曇鸞大師の『往生論註』から大きな影響を受けています。これを考える時、のちの人が親鸞聖人を曇鸞大師の再誕と敬うのももつともなことでしょう。

次に阿弥陀如来の化身についてですが、親鸞聖人はご自身を「煩惱具足の凡夫」といい、「愚禿」と名乗られました。その方を如来の化身というのはなぜでしょうか。

親鸞聖人の主著『顕浄土真実教行証文類』総序に、

ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひがたくしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり (二二三頁)

という言葉があります。遇いがたいのに今遇うことができ、聞
きがたいのにすでに聞くことができたことを、深い感動をもつ
て述べておられます。それは、仏の言葉、真実の教えに、七高
僧のお示しのおかげで出遇わせていただいたという深いよろこ
びです。そして、自身を仏の言葉、真実の教えに導いてくださっ
た方々も、真実の世界から現れ出て来てくださった方だと見て
いらつしやるのです。『高僧和讃』源空讃に、

源空勢至と示現し あるいは弥陀と顕現す (五九七頁)
と述べて、源空(法然) 聖人を阿弥陀如来の化身と敬つてお
られるのです。

こうして考えてみると、私たちは親鸞聖人のご教導によつて、
阿弥陀如来の救い、七高僧のお示しに出遇うことができました。
聖人が七高僧を敬うのと同様に、私たちからいえば親鸞聖人ご
自身も、真実の教えに導いてくださった阿弥陀如来の化身と讃
仰せずにはおれないのです。親鸞聖人の本地をたずねるとその
ように味わわせていただけます。

■法然門下の親鸞聖人

九歳で出家得度し、比叡山で修学なさった親鸞聖人は、二
十年間の修行では煩惱を断ち切ることができず、法然聖人の

もとへ行かれます。これは生涯の師との出遇いとなりました。
法然門下の親鸞聖人は、法然聖人の一言ひとことを真実の救い
に出遇えた感動の中に受けとめていたことでしょう。それを本
書では「上足の弟子」となったと記しています。「高弟」「上
席の門弟」といった意味の言葉ですが、大勢いる他のお弟子さ
んと比較して偉い弟子だった、という表現には違和感がありま
す。法然聖人の著『選択本願念仏集』の書写を許されたこと
や、承元の法難といわれる念仏弾圧で流罪に処された数少な
い門弟の一人であったことなどを挙げて、偉い弟子であったと
主張することもできるかもしれませんが、ですが、ここでは親鸞
聖人の生き方と、それによる私たちへのご教化を考えてみたい
と思います。

親鸞聖人は、法然聖人の、聖(独身)で念仏ができなければ
妻帯して念仏しなさい、との教えに基づいて結婚し、妻恵信尼
さまとともに念仏の生涯を送ったといえます。西本願寺に伝わ
る恵信尼さま自筆の手紙からは、阿弥陀如来の願いのなかで、
お互いを敬愛することの大切さを感じ、手を合す報恩感謝のう
ちに生き抜き、お浄土へ生れて往かれた夫婦の生き方がうかが
えます。

親鸞聖人が明らかにしてくださった浄土真宗とは、偉い僧侶

になつて人から認められることを目指すものではなく、凡夫が
阿弥陀如来の救いに出遇い力強く生きていくことができる道で
す。結婚をすればそれだけ悩みも増えるでしょう。罪深い生き
方を離れることができるなら思い悩まずにすむかもしれません
が、そうはいかないのが私の真の姿です。親鸞聖人は、「凡夫
直入」「報土往生」の教え、つまり凡夫の身のままで救われ
ていくお浄土への道を、ご自身の身をもって明らかにしてくだ
さったのです。「在家止住の愚人(生活に束縛され、罪業を
重ねながら生きるしかない凡夫)」においては、法然聖人のも
とで学んだ多くの念仏者のなか、親鸞聖人の生き方とご教化に
よつてこそ、お浄土への歩み、仏道に導かれたのだと、親鸞聖
人のご生涯を偲ばせていただくことができます。

学習のポイント

- (1) 親鸞聖人のご生涯を学ぶことの意味を考えてみましょう。
- (2) 親鸞聖人を阿弥陀如来の化身と敬うのはなぜか考えてみま
しょう。
- (3) 凡夫の身のままで救われていく教えとはどのようなもので
しょうか。